

ライトなつながりの効能

いとう あきひで
伊藤 彰英

●基幹労連・中央執行委員

50歳を迎え、大学時代のサークルの悪友はもとより、お世話になった諸先輩方や慕ってくれた後輩への貢献として、「ちょっと大がかりな飲み会」をセットしてみることにした。初めての試みでもあり、四半世紀以上の経過は名簿集めの作業を難航させたが、年賀状からフェイスブックまで様々な媒体を駆使しながら、時には新手の勧誘かと胡散臭がられながら、まずは初代の1983年卒から9学年分100人の名簿を集め、そのうち40名が参加してくれた。翌年には2006年卒までの24学年100人が参加し、世代を越えて大いに飲んだ。

いわゆる同窓会といえば、社会的成功者の集まり、自慢話大会、仕事の人脈探しなどと揶揄されることも少なくないが、私は一概には決めつけられないと思う。参加者は社長業に邁進している奴や海外勤務先から駆けつけた奴だけでなく、4児の子育てに奮闘する母、3度目の離婚にも懲りてない奴、仕事に疲れて早期退職した奴、風貌が別人のように激変した奴など、決して順風満帆な者ばかりではない。そうまでして集まった参加者は、ノスタルジーに浸るだけでなく「あいつ頑張ってるな」「負けてられないな」「もう少し頑張るか」「その考え方もあるな」と、古い仲間と会話し、時には叱咤激励され、大いに刺激を受けてリフレッシュした。

もちろん24学年も集まれば大半は知らない者同士であるが、かつて共に過ごした仲間、同じ組織に所属していた先輩後輩という集団に再び身を置くことによって、共存・共生というフィルターを通して、過去の自分像を客観的にとら

えることができる。そのうえで今の自分の立ち位置と成長度合いをも測ることができる。世代は違えども同じ箱の中で過ごしたという共有感とともに、何よりも、集団が日常的には差し障りのある人間関係をひきずらないという適度な距離感にあることがいい効果をもたらしているであろう。

2年前、労働調査協議会において、職場・地域・家族・友人などの人間関係とつながりについての調査分析を行った。人とのつながりの希薄化が組織への帰属意識を低下させ、それは集団・組織においてマイナスに作用するため、環境づくりが必要であるという考察である。確かに日常的にどっぷりと浸かっている組織に立脚すればこうした判断に立つのであるが、一方で過去という時間軸に重きを置いたライトな人間関係にもとづくつながりについても、帰属意識がどうであれ、それはそれで居心地が良く有意義であることを実感した。それは共通の生い立ちにもとづく一定の価値観や、しがらみのない本音の会話に起因するところなのかもしれない。むしろこうしたつながりは、個人を前向きにさせ、結果的に集団・組織においてプラスに作用しているのではないか。

さて、当日の私はと言えば、先輩たちの変わらぬ元気さと、後輩たちのバイタリティーの高さに大いに活力をいただき、心身ともにエネルギーで満たされた。それに反して、盛り上がりすぎて財布の中は空っぽになっていた。これがバブル世代の悪い癖だ……。